

ローカル SDGs と新しい人のつながり

阿部 篤

はじめに

確か小学生の頃だったと記憶するが、藍住町の未来を絵で描いてみようという課題があった。私は、高速道路が走り、ビルが立ち並び、空港まであるような「都会的な」藍住町を描いた。1970年代、当時の藍住町の人口はおよそ1万人。見渡す限り田畑の広がる町だった。あれから何十年。藍住町は、高速道路が走り、大型店舗が立ち並ぶ「都会的」な町に一変した。

本稿では、子どもの頃に思い描いたような「都会的な」町となった藍住町について、私がかうなってほしいとイメージする20年後の風景を描いてみたい。

持続可能な未来のためのローカル SDGs

私は、20年後の藍住町が、ローカルな範囲においてSDGs（持続可能な開発目標）を達成しているような町となることを強く望んでいる。SDGsは、環境・社会・経済課題の同時解決を目指した世界共通の目標だ。SDGsを藍住町というローカルな範囲で実現することが、世界や日本の動きと整合性を保ちながら、町の持続可能性を高め、誰もが住みやすい魅力的な町の実現につながると考える。環境省は「地域循環共生圏」という概念でローカルSDGsの達成を目指しているが、これを藍住町という範囲で実現したい。

SDGsのポイントは同時解決だ。SDGsの掲げる17の目標のどれか一つだけを達成するのは比較的容易だが、他の目標にも配慮しながら達成することは案外難しい。一方で、気候変動対策などのように、他の課題の同時解決につながりやすく、効率的に課題を解決できるものもある。同時解決しながら持続可能な藍住町の未来を創っていきたい。

脱炭素の実現

ローカルSDGsの一つの例として、目標13「気候変動に具体的な対策を」を取り上げて、20年後の未来を描いてみたい。

バイデン政権が誕生した今、世界は間違いなく脱炭素に向けて動き出している。脱炭素は、化石燃料の使用量を減らす低炭素とは全く異なる。低炭素を目指すのであれば、他の国や地域が化石燃料使用を削減するまで様子見した方が得になるが、脱炭素、つまり世界中で化石燃料を使えなくなる日が来るのであれば、早く取り組んだ国や地域が得をする。藍住町も他の地域に先駆けて脱炭素を目指すべきだと考える。

脱炭素のためには、電気、燃料、熱の3つの分野で化石燃料を使わないことが求められる。

まずは電気。太陽光発電については、極めて優良な農地を有する藍住町では地表面への直

接設置をやめて建物の屋上に限定すべきだろう。町内の大規模な建物の屋上だけでも相当な面積を確保できる。また、町内に多い農家の納屋への設置は有効であると考えられる。納屋や住宅の屋根への太陽光発電装置の設置は、災害時に停電しても電力を自給できるという利点もある。SDGs の目指す同時解決の一例である。

次に燃料。車については、今後 20 年でガソリン車から EV（電気自動車）へと大規模な転換が進むことは間違いない。一戸建て住宅の多い藍住町では、自宅で EV 電源が確保しやすいという利点がある。また、これからは EV 電源のあるところに車と人が集まるようになるので、公共施設や大規模商業施設への EV 電源設置も進めたい。

最後は熱。温暖な気候の藍住町では、冬の暖房における灯油の使用をやめて、最も効率的にエネルギーを取り出せるエアコンにシフトすることと、住宅の断熱性能を高めることが有効だろう。ここでも、断熱性と耐震性の両方を兼ね備えた家にするすることで、同時解決が達成できる。

生態系保全とまちづくり

気候変動と同じように、SDGs の 17 の各目標について 20 年後の姿を設定し、持続可能な未来を追求したい。例えば、目標 15「陸の豊かさを守ろう」を町内で実現するためには、生態系に配慮した農業を推進することが魅力的に思える。農地は藍住町のかなりの面積を占めており、町内で生物多様性を確保するためには、生態系に配慮した農業の面的な拡がりが必要だ。

あるいは、目標 11「住み続けられるまちづくりを」の目標達成に貢献するため、町内の大型商業施設を巡回するコミュニティバスの運行を検討してもよいかもしれない。公共交通機関の少ない町内で、高齢者や障がい者の移動の権利を確保することは大切だ。また、高齢者のモビリティを確保するために、一人乗り超小型 EV の普及を進めることも有効だろう。さらに、自動車に依存しすぎた町民の交通手段を変えるため、藍住町の平坦な地形を活かして、自転車の走りやすい町にすることにも取り組みたい。

農業、商業、工業、サービス業がバランスよく揃っていることは、自立分散型の地域を目指すローカル SDGs にとって有利な条件となる。町外から何かを誘致するのではなく、町の中に今存在している地域資源を最大限に活かし、世界や日本全体の動きを見据えながら、持続可能な町を作っていきたい。

新しい人のつながり

以上に書いたローカル SDGs を達成するためには、藍住町という地域に住んでいる人たちの自発的行動が不可欠だ。案の企画力と案の実現能力は全く別のものであり、町民のインセンティブ、やる気を引き出すことにより、ローカル SDGs の達成を加速したい。

幸いにも、藍住町には集落単位で高齢者を中心とした昔ながらの近所付き合いが残って

いる。これは、ローカル SDGs を達成する上で、大きな強みだと考える。一方で最近、地域コミュニティ活動に興味を示す若い人も多くなっている。地域とのつながりが少ない中高年世代より、むしろ若い世代を巻き込む方が簡単かもしれない。県内の大学と協定を締結して大学生に参画してもらってもよい。

その際に、改めなければならないことを二つ述べてみたい。一つはジェンダー平等を実現すること、もう一つはコミュニティ活動参加者の多様性と開放性を高めることだ。

例えば、藍住町で暮らし始めた女性が、昔から続いている地域のお祭りに興味があって参加したとしよう。そこで目にする光景が、男性は座ってお酒を飲んでいて、女性は当然のように「まかない」をしているようなものであれば、来年も参加しようと思わないだろう。若い人を含めて地域のコミュニティ活動を活性化しようとするなら、男女の役割分担を見直すことが不可欠だろう。これが、改めなければならないポイントの一つだ。

もう一つは、藍住町に移り住んできた人を含めて、多様な人たちを対等な立場で巻き込むことだ。中でも、徳島市内に職場を持つ住民は、比較的あっさりとした人間関係になじんでいて、地域とのつながりが薄い。人は居場所を求める。ゆるやかな関係を好む人も、自分の居場所があれば参画する。古くからある地域コミュニティの中に、対等な立場で参画できる多様な住民の居場所をつくることできれば、地域コミュニティを活性化できる。

男女が対等で、多様な人が自発的に動くコミュニティ。義務のないゆるやかな人間関係。ローカル SDGs を達成するため、古くからある近所づきあいの延長線上に、このような新しい人のつながりを作っていきたいと思う。

おわりに

子どもの頃に思い描いた「都会的な」藍住町の風景と、今思い描く 20 年後の藍住町の風景はずいぶん違っている。ひたすら成長を求めた時代から持続可能な未来を追求する時代へ。当然のことながら藍住町の未来は、世界や日本の未来とつながっている。

新型コロナウイルスによって、本来あるべき世界から別の世界に移行してしまったような今年の冬、東京の友人は、外出自粛があっても、自分の畑で取れた野菜をいただきながら家で過ごせる藍住町の暮らしを「生活の質が高いね」と言って心底うらやましがった。都会的な暮らしが輝いて見えた時代は終わったのである。

私は、藍住町に住む個人として、ローカル SDGs の達成に向けて、できることをしていきたいと考えている。生まれ育った藍住町を、より一層魅力的な町にするために。